

そこで私の仕事の第一目標を会員倍増におきたい、周辺事情から倍増は云うべくして容易でない。本会の活動内容を単に水素のみでなく間接的に水素と関係あるもの、さらに水素と関係ない新エネルギーも水素との比較物として受け入れるなどの寛容さも必要となるかも知れない。また会を支えている維持会員へのサービスのために別の企画も必要かも知れない、本会の最大の泣きどころは水素と関係ある産業が極めて少く、全体の取引額も小さいことである。さらに最近の不況下であるので特別な配慮を要するであろう。

私は会員倍増を提案したが、この種の仕事は最も不得手であり、達成の自信はありません。しかしそれ無しには本会の存続もむづかしいからです。会員の全員に是非ご理解と積極的なご協力をお願いする次第であります。

## (2) 第6回世界水素エネルギー会議のことなど

H E S S 会長 太 田 時 男

世界水素エネルギー会議はW H E C の略称で知られている。第1回のMiami, 第2回のZ ü r i c h, 第3回の東京, 第4回のPasadena, 第5回のTrontoに引続き, 1986年7月20日~24日にAUSTRIA のVienna (Wien) で第6回が開催された。

筆者は主催学会のIAHE (国際水素エネルギー協会) の理事 (創立メンバー) として当初から, W H E C の運営に当たってきた。本誌に第6回W H E C の概略を記録しておきたいと思う。

会議場は宮殿Hofbury, Conference, Chairman はNikola Getoff (Vienna 大学) が務めた。参加者数は登録者のみで360名 (第1回~第5回のうち最少。ちなみに東京会議では, 550名弱であった)。これはドル安のため, アメリカからの参加者数が少なく, 相当数の参加申し込みが取消されたためである。

一方, 参加国は42ヶ国に及び, これは過去のW H E C で最多を記録した。主な国からの参加者数は次のようである。

西独 (75), オーストリー (44), アメリカ (36), フランス (22), カナダ (19), イタリア (16), 日本 (15), 中国 (15), スイス (12), インド (12), 英国 (11), スウェーデン (11), ベルギー (9), ブラジル (7), ソ連 (6), ブルガリア (5), コンゴ (5), エジプト (4), デンマーク (4), ノルウェー (3), オランダ (3), UAE (3), など (2名以下省略)。

水素エネルギー研究・開発が, ますます盛大な機運にあるのは, カナダ, フランス, ドイツ, 中国ソ連, などと見受けられた。特に中国の高い意欲には一驚した。

会議の印象としてはBockris やGeloff 一派の発表のように光化学の専門的な高度なものか

ら、中国の一部の人達のナフサや化石燃料からの水素製造やその利用系などの現システムの紹介まで幅広いスペクトルがみられたことである。概して高度のもの比重が高まっていた。

会議の内容は Hydrogen Energy Progress Vol.1～Vol.3 (1,432頁)として Pergamon Press より出版されている。

なお、21日の開会式の後ホテル Bristol で理事会が開かれ、第7回は MOSCOW で1988年5月30日～6月5日の間開催されることがソ連の科学アカデミー会員として参加した。M. A. Styrikovich から提案されたが、この5月末はまだ西側諸国は休暇期に入っておらず、筆者の発言でソ連側も再考を約束した。

1990年の第8回は Honolulu, 1992年の第9回は Paris が有力である。このような、WHEC 誘致の過熱振りに戸惑いを覚えた。

第8期・後期(1987年度)から会長を古浜庄一副会長に引継ぐことになった。太田も HESS の創立以来、幹事長、副会長、会長(第6期、第7期、第8期・前期の計5年間)と水素エネルギーという人類初のエネルギー概念の普及に努力してきたが、横浜国立大学の工学部長の仕事が大学改革の折、きわめて重要なポイントにさしかかり、手が抜けず、眼が離せない状況になったため、事務局とともに古浜氏へバトンタッチすることにした。

新しい技術体系が一般に普及し、容認されていくには、その概念や理念を普及する努力が、もっとも必要である。体系の要素技術が先行しすぎても道は拓けず、また概念の普及だけでも体系の実現は宙に浮く。

今後とも IAHE と協調し、HESS はその個性を若々しく活かしつつ、水素エネルギー・システム実現の目標のため進みたいものである。

### (3) 水素生産に関する一考察

個人会員 市川 弘

私は、水素エネルギー協会編「水素エネルギー読本」を読んで感銘を受け、個人会員に志願した者です。石油資源の枯渇が現実のものとなってきた今、次のエネルギーは水素エネルギーが主役と信じます。しかし、水素の生産、貯蔵、運搬など多くの問題があり、世界中がそれらの問題解決に向けて、研究開発に努力している現状だと思えます。21世紀には、ガソリンスタンドに替って「水素スタンド」が登場すると信じます。

水素の生産に関する一つのアイデアを述べます。それは、水素生産のためのモデル基地と各基地から運搬してきたと想定しての、モデル集合貯蔵基地の二つの基地の建設であります。それらのモデ